

## ヨハネの手紙第一5章「神から生まれた者」

### 1A 神を愛する者 1-5

1B 神の子どもたちへの愛 1-2

2B 神の命令 3-5

### 2A 神の証し 6-13

1B 御霊による証し 6-8

2B 御子についての証し 9-10

3B 永遠のいのち 11-13

### 3A 神への願い 14-17

1B 聞いてくださる確信 14-15

2B 罪を犯している兄弟 16-17

### 4A 神からの守り 18-21

1B 世を支配する悪い者 18-19

2B 永遠のいのちなるキリスト 20-21

## 本文

ヨハネの第一の手紙5章です。ついに、第一の手紙の最後に来ました。これまで手紙の中で、ヨハネは同じことを何度となく繰り返しながら教えていったのに気づいていると思います。神について、この方は光であること。それで闇の中を歩まない、罪を犯さず、義を行うこと。それから、この方が愛であり、互いに愛すること。そして、背後に反キリストがおり、イエス・キリストが肉をもって来られたことを否定する者たちであり、「知っている」ことを誇り、教会から離れていっているという問題を取り上げています。

そして5章は、私たちは神から生まれた者であり、永遠のいのちを御子にあって持っていることを教えます。

### 1A 神を愛する者 1-5

1B 神の子どもたちへの愛 1-2

<sup>1</sup> イエスがキリストであると信じる者はみな、神から生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します。

「神から生まれた」ということ、ヨハネは福音書の冒頭で語っていました。「1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神

によって生まれたのである。」

そして、「生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します」と言っていますが、これは、4章で話していることの続きです。21節で、「神を愛する者は兄弟も愛すべきです。」と言っています。先週もお話しましたが、同じ父なる神から生まれています。血がつながっています。キリストの流された血が、私たちの心に注がれています。東アジアの青年キリスト者大会で、韓国の牧師さんが説教しました。「私たちの体はそれぞれの血液型があるけれども、キリスト者には同じ血液型がある。J型だ」と。JesusのJです。そして、その流された血によって、御霊によって、私たちは神秘的に一つになっており、その一体を、聖餐において分かち合うのです。

ですから、互いに愛し合うのです。憎むことは、そもそも神から生まれていないからできることです。知識と称するものによって神につながろうとしています。はっきり言えば、ただの人なのです。御霊によって生まれておらず、未だ生まれつきの人間なのです。ユダが手紙の中で、このことを話しています。「ユダ 1:19 この人たちは、分裂を引き起こす、生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません。」

<sup>2</sup> このことから分かるように、神を愛し、その命令を守るときはいつでも、私たちは神の子どもたちを愛するのです。

4章 20-21節で、神を愛していることについてヨハネは教えていました。神を愛しているならば、その命令を守ります。そして、その命令に兄弟を愛しなさいというのがあるのです。それを、神から生まれ、神の子どもとなったということからも、仲間を愛することがわかります、ということです。私たちは神の家族に入れられました。みな信じる者は、神の子どもです。だから、兄弟であり姉妹です。それで愛し合います。

## 2B 神の命令 3-5

<sup>3</sup> 神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。

イエスが弟子たちに、このことを教えておられました。「ヨハ 14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。」愛していることを、どのように示すのか？と言えば、この方の言われることを聞いて、従うことです。命令を守ることによって、愛していることを示します。

そこで大事なことは、「神の命令は重荷とはなりません。」ということです。愛において、命じられていることを重荷と感じるでしょうか？愛が全うされていれば、しなければいけないことが、義務でしているようなことはなくなるはず。ヤコブが、おじのラバンの家に仕えることを決めましたが、それは、彼の娘ラケルが好きになったからです。七年間、働きました。「創世 29:20 ヤコブは彼女を

愛していたので、それもほんの数日のように思われた。」とあります。愛している人のためにすることは、重荷とはなりません。

そして、愛が全うされていれば、そこでは神のことばを守っています。「2:5 しかし、だれでも神のことばを守っているなら、その人のうちには神の愛が確かに全うされているのです。」命令が重荷と感じているのは、自分がまだ神の愛のうちに、しっかりと留まれていないということに他なりません。神の愛のうちに成長すること、その愛が育まれることが課題なのです。

そして、主ご自身がご自分の命令は重荷とはならないことを語られています。「マタイ 11:28-30 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」自分が重荷と感じている時、それは神からではなく、自分に勝手に課しているだけかもしれません。主のもとに行き、休むことが必要です。

<sup>4</sup> 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。<sup>5</sup> 世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。

3 節を読んで、「それでも、やはり主の命令を守ることは、大きな挑戦だ」と感じるかもしれません。日々の信仰の歩みの中で、世から来る圧迫はますます増えています。世の流れに逆らって生きているわけですが、その流れがますます強くなっているように感じます。ヨハネも、自分たちの生きている時代が終わりの時なのだとはっきりと言っています。その闇の力が覆っていると感じていました。それでもなお、神の命令は重荷とはならないと断言しているのです。

なぜか？その理由がここ 4 節です。「神から生まれた者はみな、世に勝つからです。」ということです。午前礼拝でお話したように、主イエスはすでに、ご自身が引き渡されるというのに、ご自身はすでに世に打ち勝ったと言われました(ヨハネ 16:33)。そして、神によって生まれた者は、このキリストにある世の勝利を、受け取っているということです。

この悪魔のしわざに、どのようにして戦うべきでしょうか？それが、「信仰」であるとヨハネは教えています。信じがたい時代に、なおのこと信じる勇気と決断です。イエス様が、ご自身の栄光をお見せになった高い山から下りてきた時です。悪霊につかれて暴れている人がいましたが、弟子たちに追い出すように願うも、できなかつたと聞かれて、主は憤られました。「マル 9:19 ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」不信仰な時代、と言われます。悪霊どもが活発に動いているような時代で、主が世に打ち勝っているという信仰を

置き去りにしている時代です。

さらにヨハネは、信仰といっても、イエスが神の御子だと信じるころの信仰が、世に打ち勝っていると述べています。神の御子というのは、神の王子であり、神ご自身であります。この方が地上を治めることによって、神の国が建てられます。この信仰をもって、すべてがこの方の支配の中にあり、この方にあつて、世と世の欲はすべて滅ぼされ、過ぎ去るのだと信じるのです。

## **2A 神の証し 6-13**

そして、ヨハネは福音書でもそうですが、この信仰には証しがあるのだということです。確信を抱くことのできる、証拠や証言があるのだということです。やみくもに信じるのではなく、真理に基づいた事柄を信じているということです。

### **1B 御霊による証し 6-8**

<sup>6</sup>この方は、水と血によって来られた方、イエス・キリストです。水によるだけではなく、水と血によって来られました。御霊はこのことを証しする方です。御霊は真理だからです。

水と血という、二つのものによって、イエス・キリストが証しされていると言います。まず、文字通りの水と血において、私たちが連想しなければいけません。「いのち」です。この方こそが、私たちが永遠に生かす、永遠のいのちなのだとヨハネは証言します。

イスラエルの乾燥した気候の中で、水はいのちです。水があるからこそ、人は生きるのだということに彼らは、水の豊かな日本以上に知っています。それで、主は、サマリアの女に対して言われました。「ヨハ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」そして血ですが、レビ記において、これはいのちそのものであると述べられています。「17:11 実に、肉のいのちは血の中にある。わたしは、祭壇の上であなたがたのたましいのために宥めを行うよう、これをあなたがたに与えた。いのちとして宥めを行うのは血である。」血が流されることによって、いのちが流されます。そして、罪の清めが行われます。医学的に分かり易く話すと、体内に血流があることによって、酸素が運ばれて、また老廃物が取り除かれます。血が流されて、罪の汚れが取り除かれ、またいのちが供給されるのです。

そこで、主ご自身が、水によって来られたということ。また血によっても来られたということは非常に大切になります。水は、地上における主の公の働きの始まりです。ヨハネから、ヨルダン川でバプテスマを受けられました。その時に鳩のようなかたちで、聖霊が降ってこられて、天から、イエス様をご自分の子であることが証しされました。そして、血は十字架において流されました。

ここでヨハネが、「水によるだけではなく、水と血によって来られました。」と言っていますが、これには理由があります。反キリストとの戦いです。2章2節で、神からの霊は、「人となって来られたイエス・キリストを告白する」と言っています。肉をもって来られたということです。血が出てきたということは、主は肉体を持っておられるということです。それで、ヨハネが反キリストの霊と呼んでいる、イエスは肉体は持っていなかったとする教えに対抗しているのです。

ヨハネは、十二使徒の中で、イエスの母マリアと共に十字架のすぐそばにいた唯一の人であると思われます。彼は、ローマ兵がこの方の脇腹を突き刺したところを目撃しました。「ヨハ 19:34-35 しかし兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た。これを目撃した者が証している。それは、あなたがたも信じるようになるためである。その証しは真実であり、その人は自分が真実を話していることを知っている。」ですから、バプテスマの時に主が水によって来られただけではなく、十字架においても、ご自分の身体から、水と血が流れ出しました。これは、体にたまっていた水分です。それが、槍の突き刺しの時に血と共に出てきました。

このことによって、確かにこの方は肉体を持っておられたことが明らかにされたのです。この方が肉体において、罪を取り除いてくださったのです。ゆえに、私たちがこの肉にあって、御霊の力によって、神の命令を守り行うことができるのです。反キリストたち、すなわち偽預言者たちは、肉に対しては、禁欲するか、あるいは、そのまま放置するかのどちらかを教えていました。言い換えれば、この世において、勝利があると信じていなかったのです。しかし、主は肉体において、罪に対する宥めを行われたので、私たちは世にあってても勝利しているのです。

そして、これらを証しするのは御霊であって、「御霊は真理だからです。」と言っています。主は弟子たちに言われていました。「ヨハ 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいませ。」イエス・キリストの真理について、御霊が証ししてくださるのです。

<sup>7</sup> 三つのものが証しをします。<sup>8</sup> 御霊と水と血です。この三つは一致しています。

興味深い表現です。律法によって、複数の証言をもって事実とみなされます。「申 19:15 いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」それで、ヨハネは、御霊がおられて、また水と血をもって、証しが一致しているから真実なのだと述べています。

キリストの教会は、いつもこの三つの証言をしています。一つは、御霊による証言です。私たちのうちにその確信が与えられます。それから、バプテスマ式です。主が水によって来られたのです。

が、私たちはこのキリストに、水のバプテスマによって一つになったことを公に言い表しています。そして、血を流されたことを記念するのは聖餐式です。

## 2B 御子についての証し 9-10

<sup>9</sup> 私たちが人の証しを受け入れるのであれば、神の証しはそれにまさるものです。御子について証しされたことが、神の証しなのですから。

私たちは、だれの証言を受け入れるのか？という問題を、ヨハネはここで説明しています。私たちは、人の証しを受け入れます。けれども、人の証しを受け入れているのならば、神の証しはなおさらのことではないか？ということです。その神は、ご自分の御子によって証しをしておられます。

人の証しが、はたしてその通りなのかどうか？という疑いをかけなければいけません。多くは鵜呑みにしていますね。ならば、神が、御子にあって証しして下さったことは、受け入れるに値するということなのです。ヨハネの福音書 5 章で、主が、いろいろな証しを取り上げておられます。バプテスマのヨハネによる証言がありました。けれども、こう言われています。「5:36-37 しかし、わたしにはヨハネの証しよりもすぐれた証しがあります。わたしが成し遂げるようにと父が与えてくださったわざが、すなわち、わたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わされたことを証しているのです。37 また、わたしを遣わされた父ご自身が、わたしについて証しをしてくださいました。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたことも、御姿を見たこともありません。」主が言われているのは、数々の、神にしかでないわざです。生まれつきの盲人を癒されたのはその一つです。またラザロを墓からよみがえらせました。そして、イエス様のバプテスマの時の天からの声、高い山に上られた時の声がありました。

<sup>10</sup> 神の御子を信じる者は、その証しを自分のうちに持っています。神を信じない者は、神を偽り者としています。神が御子について証しされた証言を信じていないからです。

神の御子を信じる時に、今、見たように、御霊がそれが真理であることを証ししておられます。けれども、これだけ神の証しがあるのに受け入れないのは、神が嘘をついていると言っているのだということを言っています。イエス様は、聖書自体がご自身を証していると言われていますが、ユダヤ人指導者が受け入れないことを語られています。「ヨハ 5:39-40 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」

## 3B 永遠のいのち 11-13

<sup>11</sup> その証しとは、神が私たちに永遠のいのちを与えてくださったということ、そして、そのいのちが御子のうちにあるということです。<sup>12</sup> 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者

はいのちを持っていません。

証しとは、御子のうちにある永遠のいのちです。サマリアの女は、目の前にある井戸の水について話していましたが、イエス様は、「その水を飲んでも、また渴く。けれども、わたしの与える水は、決して渴くことなく、泉となって、永遠のいのちに至る水が出てくる。」ということを言われました。また、ガリラヤ湖畔で、ご自身についてくる群衆に対して、「荒野でのマナを先祖は食べたが、死んでいった。けれども、わたしは天から下ってきたパンで、それを食べると死ぬことはありません。」ということを言われました(ヨハネ 6 章)。食べるもの、飲むものを越えたところにあるいのちです。霊のいのち、永遠のいのちです。

そのいのちが、御子のうちにあるのです。主は、わたしを信じなさいと言われました。今、話した、群衆のことですが、彼らは五千人に主がパンを与える奇跡を行われたから、自分たちを食わせてくれる方として、イエスの追っかけっこをしていました。ところが、主は、「わたしがいのちのパンです」と言われます。群衆は、「なんだよ、パンをくれないのか」として、つまずいて去って行きました。当時、食べ物については私たちの時代より切実でした。それで、イエスを信じるのが食べ物なのだというのは、つまずきでしかなかったのです。それで十二弟子たちに、あなたがたも離れていくのですかと尋ねられると、ペテロは答えました。「ヨハ 6:68-69 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であると信じ、また知っています。」この方に、永遠のいのちがあると証言しました。

<sup>13</sup> 神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。

ここが、ヨハネが第一の手紙を書いている、目的の一つです。これまで、目的を書いていましたね。「1:4 これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」また、「2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さなくなるためです。」そしてここでは、「永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです」と言っているのです。

私はこの手紙が、新しく信じた人々に良いと思っている理由です。御子の名を信じているみなさんは、確かに永遠のいのちを持っているのだということが、分かるようになっているのです。福音書のほうはもっと伝道的で、最後のところに、人々がイエスの名を信じて、永遠のいのちを持つためである、と言っています。ここはすでに信じている人々が、確かに永遠のいのちを持っていることを分からせるためだということです。

この終わりの時に、世の支配者、悪い者が暴れている時に、私たちが確かに永遠のいのちを持

っていることを確信することは必要です。世と世にあるものは過ぎ去るのです。それでも、私たちは生きながらえる、永遠のいのちを持っているのです。

### 3A 神への願い 14-17

そして次に、ヨハネは、御子のうちにとどまることについて、父にその御名によって祈ることを勧めています。

### 1B 聞いてくださる確信 14-15

<sup>14</sup> 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるといふこと、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。

主は、最後の夜、弟子たちに何度となく教えられました。ご自身が間もなく彼らからいなくなって、死んでよみがえられた後も、父のところに行かれるのを知って、父なる神にそのまま願いなさい、そうすれば聞かれるよと約束されました。「ヨハ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。」ラザロをよみがえらせた時に、主イエスは、父のよみがえらせてくださることを願って、聞いてくださったことを言及しておられます(ヨハネ 11:41-42)。同じように、みこころにかなう祈りを献げたら、その祈りは聞かれるのだよと教えています。

「神のみこころにしたがって」と言っていますが、これは、「神の命令を守っている中で」と言い換えていい言葉です。しばしば、キリスト者の中で、みこころにかなっているのか、そうでないのかという議論を聞きます。まるで、みこころが占いであるかのように、です。大学生が就活をしていて、この会社がみこころなのか、そうでないのか?とかいう文脈で、みこころを使います。これは異教的な教えです。みこころとは、すでに神が命じておられることです。それにしたがって祈っているかどうか?ということでもあります。「ヨハ 15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」みことばのとどまっている中で、何でも欲しいものを願うのです。そうすれば、かなえられます。

<sup>15</sup> 私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。

これは、父なる神が前もって私たちの必要を知っておられて、その願いをかなえられるからです。その時は願いがかなえられたのは、目で見ることにはできないけれども、祈りの中で確信が与えられます。父としての神への信頼があります。主が言われました、「マル 11:24 ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」ヤコブは、疑ってはいけなと戒めました。「1:5-7 あなたがたのうちに、知恵



に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。6 ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。7 その人は、主から何かをいただけるとってはなりません。」

そして、すでになえられたと分かれば、そこには平安があります。イエスさまは、世に打ち勝つたと言われた時に、平安を得るためだと言われました。「ヨハ 16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」主は、父なる神によって世に打ち勝つことを知っておられました。だから、十字架の苦難が目の前にあっても、それでも平安がありました。私たちが同じように、終わりの日における勝利を知っているので、どんな苦しみがあっても、それでも平安なのです。そのためには、祈るのです。そして、その祈りと願いがかなえられたという確信を抱いているべきなのです。

## 2B 罪を犯している兄弟 16-17

<sup>16</sup> だれでも、兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば、神はその人にいのちを与えてくださいます。これは、死に至らない罪を犯している人たちの場合です。しかし、死に至る罪があります。これについては、願うようには言いません。<sup>17</sup> 不義はすべて罪ですが、死に至らない罪もあります。

ヨハネは、願えば、父なる神は聞いてくださるという約束を教えた後で、具体的に祈り願うことについて教えています。兄弟が罪を犯していることについて、です。世に打ち勝つことについて、それは罪を犯さないでいることでもあります。悪魔の誘いに乗らないことです。けれども、乗ってしまう兄弟たちがいます。そこで私たちに必要なのは祈りです。

罪を犯しても、その人が悔い改めて、罪を言い表せば、生きることができます。ヨハネが 2 章で教えたとおりです。「2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。」パウロも、過ちに陥っている兄弟のことを助けなさいと勧めています。「ガラ 6:1-2 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。2 互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」

けれども、これは死に至らない罪についてであって、死に至る罪があるというのです。「これについては、願うようには言いません。」と言っています。これは、反キリストたち、偽預言者たちのこ

とではないかと思われます。元々、仲間ではなかったと言っています。「2:19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためだったのです。」

私たちの交わりの中にいるのだから、罪を犯してしまった兄弟のことは、立ち直るように祈ろうということです。けれども、罪を犯したとかという以前に、罪はないと言い張っている人々であり、同じ真理に立っていない、兄弟でもないと言う人たちです。ヨハネの第二の手紙でも、あいさつもしてはいけないと彼は戒めているのですが、そのような人たちです。新たに伝道するのであれば、良い試みですが、兄弟の交わりの中での働きの範疇にはなりません。

#### 4A 神からの守り 18-21

そして、最後に、神から生まれた者は悪い者から守られるという励ましで、手紙を終えます。

#### 1B 世を支配する悪い者 18-19

<sup>18</sup> 神から生まれた者はみな罪を犯さないこと、神から生まれた方がその人を守っておられ、悪い者はその人に触れることができないことを、私たちは知っています。

この手紙で頻繁に出てくる「知っている」という言葉です。知るには、二つのギリシア語があり、一つは体験的に知るギノースコウです。もう一つが、直感的に知っているオイダスです。この三つはオイダスです。私たちが体験していなくても、直感的に、私たちは悪い者、悪魔から守られているということは知っている内容であります。

一つは、「神から生まれた者はみな罪を犯さない」ということですね。罪を犯すのが生活のスタイルになっていないということです。神から生まれており、神の種があるので、罪を犯せないのです。「Ⅱペテ 1:4 その栄光と栄誉を通して、尊大いなる約束が私たちに与えられています。それは、その約束によってあなたがたが、欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」反キリストたちは、罪を犯してもよい、というか、肉に対して行っていることは関係ないので、罪を犯すというような考えさえないでしょう。

次に、「神から生まれた方がその人を守っておられ、悪い者はその人に触れることができない」と言っています。神から生まれた方とは、御子のことです。パウロが、ピシディアのアンティオキアの会堂で、次のように教えています。「使 13:33 神はイエスをよみがえらせ、彼らの子孫である私たちにその約束を成就してくださいました。詩篇の第二篇に、『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ』と書かれているとおりです。」よみがえりが、その生まれたという意味です。

そして、よみがえりのキリストが、神から生まれた者を守ってくださっています。イエスは何度となく、ご自分の手から私たちを手放さないことをお語りになっていました。「ヨハ 10:27-28 わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。」

そして、悪い者は、「その人に触れることができない」とまで言っています。ここで思い出すのが、ヨブです。サタンが、神に対して、ヨブが神を恐れているのは、「1:10 あなたが、彼の周り、彼の家の周り、そしてすべての財産の周りに、垣を巡らされたのではありませんか。」と訴えています。それで神は敢えて、それに触れることを許されましたが、ヨブ自身には手を伸ばしてはならないと命じられます。それからサタンはさらに、彼の骨と肉を打つてみてくださいと言うので、神はそれもサタンに任せますが、「彼のいのちには触れるな。(2:6)」と言われます。神は、ご自身のヨブとの関係を切ることなく、見捨てることなく、垣を造られてサタンから守られました。

主は、たとえ悪魔によって大きな試練を私たちが受けても、このように、敗北するような形で彼が触れるようには決してなされないのです。スミルナの教会の人々に対して、イエス様は約束されました。「黙 2:10 あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」

<sup>19</sup> 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。

ここで明確に、二つの世界があることを教えています。私たちは神に属しています。けれども、世全体は悪い者の支配下にあります。これまで、一つだと思っていた人々がそうでないことが明らかにされたら、私たちには衝撃です。けれども、世全体が悪い者の支配下にあることを知れば、さもありません、ということでもあります。神に属しているのか、それとも悪魔のものになっているのか、どちらかでしかないのです。

## 2B 永遠のいのちなるキリスト 20-21

<sup>20</sup> また、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことも、知っています。私たちは真実な方のうちに、その御子イエス・キリストのうちにいます。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

御子を知る理解力も、与えられていることを私たちは知っています。これは、自分の知力や意欲ではなく、ただ神によって生まれたことで与えられているものです。さらに、この方のうちにいます。この方を理解しているだけでなく、この方のうちにいる、つまり、知られているのです。知って

いるだけでなく、知られています。この交わりの中に私たちは入れられています。

そしてヨハネは、最後に大胆に断言します。「この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」であります。手紙の冒頭で、「1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」と言いました。ここで、はっきりと、この方こそが、まことの神、永遠のいのちなのだということです。人として来られた神にこそ、永遠のいのちがあり、この方こそが永遠のいのちです。

<sup>21</sup> 子どもたち、偶像から自分を守りなさい。

イエスがまことの神、永遠のいのちであるのに対して、そうではないところで知識を振りかざしているのは、すべて偶像なのです。父なる神が御子をこのように証しされているのですから、そうではないものを持ち出してきたら、それは神以外のもの、偶像なのです。それをヨハネは、はっきりと言っています。他の神々、偶像を拜むことになるから、だから、反キリストには気をつけなさいと注意しています。ある人が言いました、「イエスが実際はどのような方かもっと知っていこうとする働きに関わるのを教会が忘れる時には、いつでも、偶像とイデオロギーが間近に迫っている。」<sup>1</sup>

主イエスにこそ、いのちがあります。この方が独り子の神です。私たちがこの方を知ること目標としていく限り、守られます。そして、この方ではないものに信頼を逸らしていくようにするものから、守られていかなければいけません。

---

<sup>1</sup> <https://www.facebook.com/RonSCantor/posts/10157988055681899>